



旧文書館(現春日山庁舎・山口博物館隣)書庫内の毛利家文庫

毛利家文庫と山口県文書館

《毛利家文庫と山口県文書館》

昭和27年(1952)、旧萩藩主であり近代には公爵家であった毛利家から、毛利家文庫 5万点が山口県に寄託されました。毛利家文庫は、東京の毛利邸(芝高輪南町)で明治16年(1883)から昭和22年まで続いた修史事業(家史編纂事業)に用いられた文書群です。戦後、事業中止を決めた毛利家は、毛利家文庫をひろく学術研究のために利用してもらいたいという考えから、県への寄託を決めました。

毛利家文庫は、県立山口図書館に移管されます。館長鈴木賢祐(すずきまさち)を中心とする図書館員は、その活用方法を検討する中で、当時の日本にはまだなじみの少ない「アーカイブズ」という機関が諸外国にあることを学びます。そして、山口県にアーカイブズ＝文書館を設置するよう知事に提言し、実現したのです。日本最初の文書館が山口県に設置されるきっかけとなったもの、それが毛利家文庫という存在でした。

《毛利家文庫の性格》

毛利家文庫といえば、①萩藩の藩庁文書群というイメージが強いでしょう。しかしこれ以外に、②毛利家の家文書、③明治初期の山口県庁文書、④諸家文書(寄贈・購入)や、⑤明治～昭和期の修史事業で収集・筆写された史料、⑥修史事業担当部署(記録課等)の事務文書、などを含む複合的な構造をもっています。

毛利家は、明治16年、旧藩時代の大量の文書群(当初は主に①②)を山口から東京の毛利邸に移送し、それまで山口で行っていた修史事業を東京で行います。これが毛利家文庫のはじまりです。以後、事業過程で収集・筆写した資料、山口県庁から引き継いだ旧藩～明治初期の文書、旧家臣の文書(寄贈・購入による)などを加え、その量を拡大していきました。毛利家文庫は純粋な藩庁文書群ではなく、近代の修史事業の過程で形成された文書群という性格を強くもっているのです。



萩城御宝蔵
(正徳元年以降の場所)

萩城内の御宝蔵は、藩主毛利家の御道具類、家伝の文書記録、御仕置銀・撫育銀、藩の重要記録、そして密用方の文書記録を保管していた「貴重庫」でした。蔵は寛文元年(1661)頃に二の丸に置かれ、その後同4年に本丸西側に移設、さらに正徳元年(1711)に本丸御殿北側に新設され、幕末にいたります。現在の萩城跡、指月山神社下あたりと推測されます。

《毛利家文庫の利用》

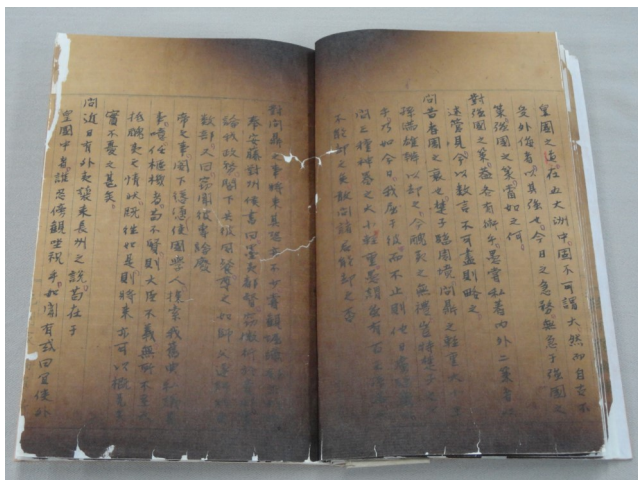
近代の毛利家文庫は、外部からの問い合わせに利用されることがありました。具体的には、①明治10～20年代の明治政府の各種調査事業、②明治末～昭和戦前期の維新史料編纂会による利用、③山口県からの問い合わせ、④贈位候補者の調査(県市町村)、⑤旧士族からの復禄申請証明、⑥郷土誌編纂での利用などです。近代の毛利家文庫は、行政や諸機関、個人、地域社会から、貴重な歴史情報資源を含む文書群として認識され、現在と比べ制限はあるものの、社会的に利用される存在でした。昭和戦後、毛利家が県への寄託を決めたのも、こうした前史をふまえてのことだったでしょう。

《生き延びた毛利家文庫》

東京で約70年を過ごした毛利家文庫ですが、その日々は決して平穏だったわけではありません。特に、大正12年(1923)の関東大震災、昭和20年の東京への大空襲は、自らの存在を失いかねない大きな危機でした。関東大震災では、毛利邸および毛利家文庫は幸いにも甚大な被害を受けることはありませんでした。しかし、当時維新史料編纂会に貸し出していた2冊の記録が、焼失寸前の被害を受けました。この2冊は同会により修理がなされ、現在も毛利家文庫に残っています。焼け跡も痛々しいその文書は、無事だった毛利家文庫も一歩間違えば同様の被害をうける可能性があったことを物語ります。毛利家では、震災後、鉄筋コンクリート造りの頑丈な書庫を新設します。東京への大空襲でも、毛利邸は奇跡的に被害を免れましたが、その周囲は焼け野原になったといえます。毛利家文庫は、災害・戦災を奇跡的にくぐり抜け、いま多くの歴史情報を伝えてくれているのです。

《密用方・御宝蔵と毛利家文庫》

毛利家文庫に残る萩藩の藩庁文書には、当職所や郡奉行所をはじめ、さまざまな役所のものがありますが、なかでも注目されるのが密用方の文書です。密用方は、7代藩主重就の時代、安永3年(1774)に設置されました。当初は重就の直命を受け、先例調査や記録編纂を担当しました。それは単なる文化事業ではなく、長府藩主から萩藩主となった重就にとって、藩内での政治力・求心力を高める意味をもつものでした。重就死後の密用方は、藩主個人のためというより、藩全体にとって必要な先例調査や記録編纂を行う役所へと変わっていきます。密用方は、重就時代に認められた先例により、必要であれば他役所の文書記録を閲覧したり、借り出すことができました。また、萩城内の貴重庫・御宝蔵内に保存されている文書を調査、利用することを許されており、加えて密用方自身の文書も御宝蔵で保存しています。御宝蔵を密用方の書庫として利用できたのです。密用方が用いていた文書記録の分類項目は、近代の毛利家文庫の分類にも採用されています。密用方が作成した記録、他役所から借り受けて書き写した記録(例えば分限帳)など、密用方が作成し管理していた文書記録が多数毛利家文庫に残っています。毛利家文庫の前史は密用方にあっただともいえるのです。



関東大震災で被災し修理された毛利家文庫の「因対問答」(75維新記事雑録30)。焼け跡が痛々しい。



関東大震災後、昭和3年に新築された鉄筋コンクリート造りの毛利家文庫書庫(小山良昌氏「公爵毛利家時代の写真群」『山口県地方史研究』101号より引用)